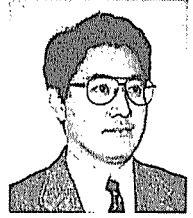


サドベリーバレー・スクールを訪問して



名古屋大学大学院 教育発達科学研究科
教授 大谷 尚

1. はじめに

筆者は、昨年(1999年)の秋に、米国の有名なフリースクール「サドベリーバレー・スクール Sudbury Valley School」¹⁾とその周辺の公立諸学校4校を訪問した。筆者はこれまで、コンピュータやインターネットの、あるいはより広くとらえればテクノロジーの教育利用を、日本の公立諸学校と日本のフリースクールとで継続的に観察し、比較しながら研究してきた。今回の訪問のねらいは、米国でもそれらを観察し、両者の比較を行うとともに、日本の学校との比較を行うことにあった。

しかし今回筆者に与えられた紙幅は限られており、それらすべてについて述べることは困難である。ただし近年、フリースクールについての関心が日本でも高まっている。本稿では、おもにサドベリーバレー・スクールについて紹介し、その中で同校におけるテクノロジーの特徴的な利用についても触れることにする。

2. フリースクールをめぐる日本の状況

最近発表された文部省の平成12年度学校基本調査速報によると、平成11年度中に学校嫌いを理由に年間30日以上欠席した児童・生徒数は13万人をこえ、調査を始めてから最大の数となった。この数字は現在も増え続けているはずであり、学校のあり方に大きな変化や

改革がなければ、今後も増え続けると予想される²⁾。

こうした状況下で、不登校の子どもたちを受け入れる場としてのフリースクールが増加してきている。最近、フリースクールを紹介する番組だけでなく、フリースクールを舞台とする連続テレビドラマやサスペンスドラマさえいくつか放送されているが、このことは、このような学校に対する社会的な関心が高まっていることを示している。これらの多くは学校法人として認可されたものではなく民間施設であり、その形態や大きさもさまざまであるが、その反面、これらは教育行政的にも実質的には徐々に認められるようになってきており、今日ではその子の所属する学区の校長が認めれば、フリースクールへ通うことは「通学」と見なされ、通学定期を購入することもできるようになっている。また学校が、フリースクールでの学習について若干の調査を行った上で、その子の卒業を認めることも行われている。また文部省は、「適応指導総合調査研究委託費」という予算を用意したが、県によってはこの経費が民間のフリースクールへも支給されている。

また最近、アメリカでは、多様な学校のひとつとして、公費補助を受けて運営する私立学校である「チャータースクール」に関心が向けられている。これは、自分たちの望む学校を企画し、その妥当性が認められれば学校として認可して公費を支給するものであり、クリントン大統領も97年の一般教書でチャータースクールへの支援を訴えている。日本で

も、学校改革のひとつのあり方として、政治的、教育行政的にも関心が寄せられ始めている。

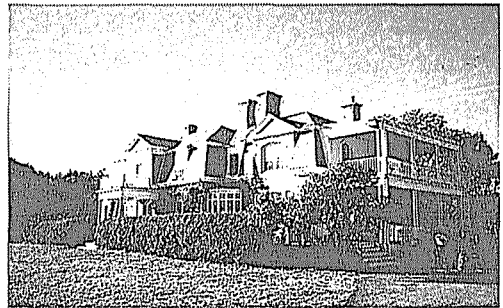
このように、学校改革のために多様な学校のあり方が模索されている今日、サドベリーバレー・スクールに目を向けることは、有意義であると思われる。

3. サドベリーバレー・スクールについて

(1) 歴史と環境

サドベリーバレー・スクール（以下SVSと記述する）は、1968年に4人によって創立された。60年代のアメリカは、公民権運動ともに多様な開放運動が高まった時代であり、多くのフリースクールが設立されたが、その頃設立されたもので今日まで続いているのはこの一校を含めわずかしかない。この学校は、今日ではフリースクールのひとつのモデルになっており、この学校をモデルとして「サドベリー」という名を冠したフリースクールが、米国内に数校存在するだけでなく、国外（イスラエル）にも存在する。

この学校は、米国北東部ニュー・イングランド地方、マサチューセッツ州の、ボストンの西30kmほどに位置するフラミンガム市にある。この学校のそばを、その昔ニューヨークとボストンを結んだボストン・ポスト・ロード（ボストン駅馬車街道）が通っている歴史のある土地である。学校は、林につつまれた



母屋



母屋から池、橋、水車小屋をのぞむ

豊かな住宅地にあり、敷地は10エーカー（おおむね200m四方）もある。この敷地には芝生や林や茂みがあり、また野花の咲く場所もある。この敷地の中の奥のほうに、地元で切り出した花崗岩で1800年代中頃に築かれた石造りの古い邸宅があり、ここが学校の主な施設となっている³⁾。また入り口近くには木造の納屋兼馬屋がある。この馬屋はこの邸宅の持ち主の馬車を引く馬を飼っていた場所であり、かなりの頭数の馬を収容でき、天井に給餌装置のある立派なものである。現在は内部が改造されて家具がしつらえてあり、防音工

事された録音スタジオもある。全体に学校というよりも家庭のような雰囲気の中で子どもたちが生活している。

また、敷地内には同じ石造りの水車小屋(現在は水車はない)と、そのために川をせきとめて作られた、小さな湖のような池があり、池の端に「マディソン郡の橋」のような屋根のついた小さな木造の橋があって、そこに池の堰が備えられており、堰の先は谷川のようにになっている。この池では釣りができ、冬季にはスケートを楽しむこともできる。このようにうらやましいほど絵画的な風景をもつこの敷地は、州立公園の自然保護地区に続いており、森や湿地や野原や丘へと広がっている。筆者が訪れたのは、ちょうど紅葉の終わりの頃であり、たともなく美しい季節のなかで、豊かで深い学校環境を堪能することができた。

(2) 生徒数、入学、カリキュラム、卒業など

この学校の児童・生徒は、4才から19才までの約200名である。学校としては、ニューイングランド学校協議会によって私立学校として認可されており、法的には非営利法人組織になっている。

SVSは、オープン・アドミッションというポリシーを有しており、この学校共同体の一員になれる自主性と責任のある子どもであれば、年齢、民族的・人種的背景、性別、国籍など一切を問わずに入学を許可する。ただし入学希望の子どもは、まず1週間、ゲスト・



音楽する子どもたち

スチューデントとして仮入学しなければならない。なお、定員の空きさえあれば、年度途中でも入学できる。

この学校には、カリキュラムや時間割はまったくない。子どもたちの必要と自主性に応じ、子どもたちの責任で学習が進められる。もちろんスタッフは必要な指導やサポートを行うが、それも子どもたちの要求に応じて行う。

子どもたちは、通常の学校とは異なり、異なる年齢の混ざった集団で活動しており、この年齢混成(エイジ・ミックス)というのが、この学校の大きな特徴のひとつである⁴⁾。

卒業は、決められた出席日数を満たした上で、自分で卒業のための論文を作成し、それを皆の前で発表し、投票によって認められることが条件となる。卒業後の進路は、まず国内外の大学進学であり、進学希望者のほとんどは第一志望の大学に進学している。その他に、ビジネスや芸術、工芸、技術などの職業に直接に進むものもいる。

(3) 学校の運営と民主主義 —自由と責任および罰則—

この学校は、昔のニュー・イングランドの町議会をモデルとした直接民主制で運営されている。日常的な問題や課題については、毎週木曜日の午後に全校会議(スクール・ミーティング)があり、そこでは、スタッフも子どもも同じ一人一票の権利を行使する。学校運営の全体については、スタッフ、子ども、保護者とその他の選ばれた委員からなる学校全体集会(アッセンブリー)で決定される。

また司法委員会が毎日午前11:00から開かれ、何か問題があればこの委員会に訴える。この委員会では関係者を呼んで聴取を行い、それらに対する対応(処罰等)を決め、全校会議に提案する。この委員会と全校会議での議題は、事前に発表される。

全校会議では、司法委員会からの提案を審議するほか、学校の様々な問題や課題を審議する。出席しなければ自分が権利を行使できないことを理解したうえで、出席しない自由も認められている。筆者が観察したときは、議題ごとに子どもたちの出入りがあり、自分の関心や関わりのある議題の審議と投票の時に出席し、それ以外の議題では退席する子どももいた。

これらを含む学校のきまりのすべては、学校の「ルール・ブック」⁵⁾に明示され、いつでも誰でも見ることができる。じっさいに筆者の観察中にも、スタッフや子どもが「ルール・ブックにはどう書いてあったっけ」とこ

れを参照するのを見た。なお、重要なことであるが、これらのルールは、自分たちの発議により、審議を経て改訂したり追加したりすることが可能である。

(4) 出版

なおこの学校には出版部があり、相当の数の本を出版している。創立者のひとりのダニエル・グリーンバーグ氏は、この学校のスタッフであるとともに、この学校や教育一般について積極的に発言し、たくさんの著作を出している。彼は東部の名門コロンビア大学の化学のテニユアド・ポジション(終身雇用教員職)を辞して、この学校を他の3人と始めた人物であり、卒業生に対するその後の調査を行って出版⁶⁾するなど、非常に研究的なアプローチをも有している。また、SVS出版では、学校のマークの入ったTシャツ、トレーナー、バッグ、ノートなども販売している。

4. 筆者のフィールドノートから

以上のような学校の概要を理解して頂いた上で、以下では、筆者のフィールドノートをもとに、この学校のいくつかの側面を紹介していく。同校での筆者自身の体験を通して、読者にこの学校を味わって頂くことができれば幸いである。なお、以下での子どもの名前はすべて仮名にしてある。

(1) 学校に着いた時

学校に着くとグリーンバーグ氏に「最初に重要な決定をしなければならない」と言われた。それは、どのように呼ばれたいか決めるということだった。私を朝礼のようなところで紹介してくれるためかと思って、「公の場で紹介してくれるのか」とたずねると、「ここには公の場なんてない。最初に紹介した人が、次の人に紹介し、そのようにしてどんどん紹介するんだ。」ということだった。確かに、時間割がないのだから、朝礼のようなものがあるはずはない。

また、写真を撮っていいかとたずねると、「大事なことをいうのを忘れていた。はじめの訪問者には、写真撮影や録音は許されていないはずだ。これはルール・ブックを見て確認する。でも、すくなくとも木曜日に全校会議があるから、そこに許可を求める提案をしよう。そこでOKになればその後から撮れるから。」と言われた。それを言われたのは月曜の朝である。筆者の訪問は一週間であるから、写真を撮れるのは木曜の夕方から金曜だけに限られることになってしまう。撮影については、デジタルビデオカメラまで用意していたので少し驚いたが、フリースクールの文化には全く不慣れではないので、これは十分に理解できた。

なお、すべてのことは全校会議で決定されることを述べたが、外部からの訪問も、全校会議の承認を得る必要がある。



納屋の中の男の子たち

(2) 活動の総合は誰か何のためにするのか

子どもたちは、読書のために会話が禁止されている部屋など、ルールのあるいくつかの場所以外では、いつ何をしても自由である。消防法の関係で鍵をかけている天井裏を除けば、一切の部屋に鍵がなく、トイレにさえない。部屋だけでなく、自分たちの持ち物にも鍵をかけない。これらはお互いの敬意と信頼を最重視していることを反映している。

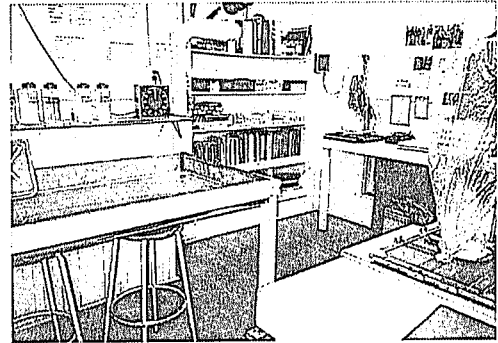
建物は2階建てで大きく立派な階段があるが、日本だったら危険なために絶対に使用禁止になるだろうと思われるような非常に急な螺旋階段もあり、これも使用されている。グリーンバーグ氏は「子どもたちはこっちの方が好きだよ」と笑っている。屋外には、学校のシンボルにもなっている大きなぶなの木が



木登り

あり、筆者の訪問中も、じっさいにその木から落ちて腕を折った子が腕をつっていたが、それでも木に登ることはルールで禁止されておらず、小さな子たちがたくさんその木に登っていた。

いくつかの部屋のうち、暗室もまた特徴的な部屋である。現像のための器具や引き伸ばし機がおいてあり、器具を水洗いするための大きな流しがある。SVS 出版からの本の写真のいくつかは、この学校に通っていたグリーンバーグ氏らの息子が撮ったものだったねとたずねると「そのとおり、暗室のこの流しも息子が作ったものだ」と答えた。現在の日本の教科で考えれば、流しの製作は、台部が技術・家庭科のなかの木材加工領域、上の部分が金属加工領域になる。そして写真技術は、残念なことにとどの教科の内容にも無い。しかしここでは、ある子が写真をやりたければそれをやらせる。しかもその目的が写真であっても、その子の活動はこのように写真技術の範囲にとどまらず、写真を撮るために流



暗室

しが必要ならそれも作る。それらのすべてが、自分の目的を達成するための活動だからである。このように、ここでは多様な活動が、じつに自然なかたちで、子どもの活動の目的のために総合されている。

学習指導要領が改訂され、日本でも、小・中学校で2002年から、高校で2003年から、「総合的な学習の時間」という授業が始められ、障害児教育諸学校でも実施される。これは、道徳をのぞけば、戦後の日本の学校教育での初めての「教科書のない時間」であり、その意味では、フリースクールでの学習活動と共通する側面を有している。しかし日本で現在そのために行われている準備では、教える主体としての教師がなんらかのねらいをもって単元を構成することに、各学校でエネルギーを注いでいる。つまり、「総合的な学習の時間」では、多くの場合、教師によってあらかじめ総合された活動が、課題として子どもに与えられることになるのである。しかしSVSでは、総合は教師によってなされ

るのではなく、総合とは、こどもが自分の目的の達成のために、つぎつぎに必要なことを行うことそのものである。つまり、現実的な目的に応じた活動は、必然的に総合的なものにならざるを得ない。このことは、日本での「総合的な学習の時間」における活動の「総合」の意味に問いを投げかけているように思える。

(3) 司法委員会

—叱ることと罰とは異なる—

さきに司法委員会について少し述べたが、筆者の観察にもとづいて、ここでもう少し紹介したい。

ここにはじつに様々な訴えがなされる。筆者の観察した時も、暴力をふるわれた、自分のもっている怪獣のカードを破られた、ドアにきずをつけた子がいる、などたくさんの件が扱われていた。スタッフも訴えられることがあり、筆者の滞在中も、創立者のひとりのあるスタッフが車の運転のことで生徒に訴えられていた。また、ほかの子が危険なことをしているのを見たのにそれを司法委員会に訴えなかった子が、自分で自分を訴えて（自首して）来ていた。それは、訴えなかったということが、ルール・ブックの前文、つまり「すべての構成員は、この学校の存在の核心となる自由、敬意、公正、信頼、秩序の雰囲気を持続することに貢献する行動を通して、この学校の全体的な快適さに責任を有する。」に違反するという理由による。

委員は、常勤のスタッフが必ず一人入る以外すべて子どもである。審議の上判決を受けると、訴えられた子はサインをする。ところで、サインするということには重大な意味があると思われる。それは通常、「叱られる」ときはサインしないからである。

叱るということは、権威にもとづく一方的な行為であって、叱られている子がそれを承認するとかしないとかの意志を表明できるコミュニケーションではない。（叱られている子ができるのは、謝ることである。）

それに対して、サインをするということは、訴えられた子が、その結果を主体的に判断して受け入れるということを示している。つまり、この学校の制度での訴えや罰は、叱ったり叱られたりしているのではない。社会的なルールの中で、行動が評価され、判断され、結果が下され、それを受け入れているのである。この点が、権威に基づく「叱り」とは異なる。

フリースクールのこのようなシステムについて、日本のフリースクールに通う子どもさえ「反省して謝れば罰は不要なのに」と思うと聞いている。しかし謝るということは、気持ちや決意の表明であるのに対して、罰を受け入れるということは、学校という社会に対して、自分のしたことを社会的に償う意志を表明するということである。そして罰は、構成員がきちんと償いを行い、その後もその社会の構成員として「敬意と信頼をもって」受け入れられ続けることを保証するための制度なのである。このように、両者は本質的に異

なると考えなければならない。

なお、筆者の観察したときには、カード破き事件の審理の際に、別の件での被告の子が、カードの値段のことで意見を求められていたが、このことも、訴えられた子は叱られるために呼ばれているのではないということをよくあらわしていると思う。その子が叱られるために来ているのなら、神妙に、あるいはいしゅんとしていなければならない。叱られるために神妙にしている子に、叱る側がたとえ別の件でも参考意見を求めるようなことは考えられない。むしろ被告は、司法委員会には、共同体の成員として参加しているのだからこそ、意見を求められることもあるのだと解釈できる。

(4) 学習とリアリティ

ところで筆者の訪問を新聞が取材することになり、新聞社の記者とカメラマンが来て、まず記事のための写真を撮ることになった。そのときに、グリーンバーグ氏がカメラマンに、「コンピュータ室で、子どもたちを観察している大谷教授の写真を撮るなら、子どもたちを集めようか。よくあることだから気にしないでいいよ」と言った。その時、筆者は少し変だと感じた。こういう学校で、やらせのようなことをするのはおかしいのではないかと思ったのである。

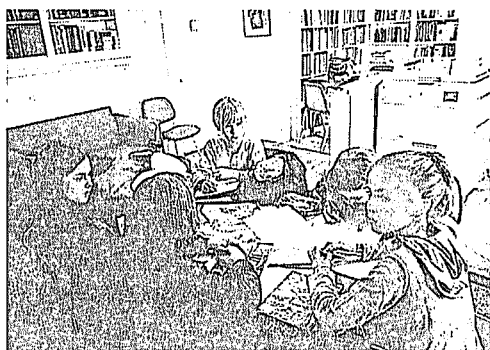
しかし部屋に行ってみると、部屋のすべてのパソコンは子どもたちに使われていて、それぞれみんな何か仕事に熱中していた。また、

集められてわざとやっているふりをしているように見える子はひとりもいなかった。そのため筆者は、「集める必要はなかったんだな」と思った。ところがじつはこの子たちは、グリーンバーグ氏によって集められた子たちだった。ではなぜ、集められた子に見えなかったのかといえば、みな、そもそもコンピュータを使って行う自分の課題や調べたいことを持っているので、呼ばれたことは単なるきっかけでしかなく、どうせここに来て、そのうちにそれらの作業をするのである。つまり皆、ここに来て自分の仕事を本当にしているのだから、わざとやっているふりをする必要などないのである。結局、子どもたちは集められたのだが、実際に自分の課題をやっている点で、嘘でもやらせでもない。そういう意味で、この学校にやらせはあり得ない。ここでの子どもの活動には、つねに圧倒的なリアルさがある。そのリアルさの前では、少しのアレンジは、なんの意味ももたないのだと強く感じた次第である。

(5) 常識的な発達観との摩擦

この学校に3人の子を通わせている母親に会って話を聞いたが、とくに、リーディング（本などを読むこと）についての内容は興味深かった。

アメリカでは、きちんと読めない、あるいは、年齢に応じた読む能力をもっていないという子がかかなり多く、つねに問題になる。（読めないことを読書障害 *dyslexia*、その



女の子たち

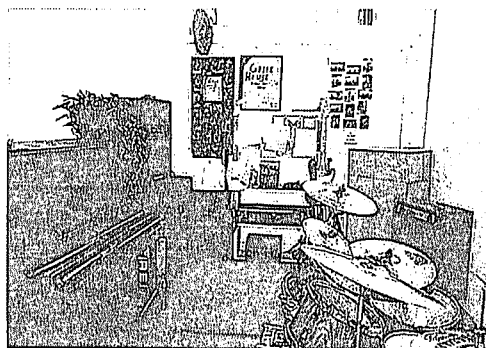
子（人）を特書障害者 nonreader などという）。そのため、初等教育での最大の目的はきちんと読めるようにすることであると言われるし、初等教員（小学校の教師）に求められる最大の条件は、子どもをきちんと読めるように教育する能力であると言われる⁷⁾。

ところでSVSでは、カリキュラムが小さいないため、何歳から文字を教えるとか、何歳から読み始めなければならないというような基準はなく、本人が学習したいと思わなければ、16才になっても読まなくてかまわない⁸⁾。筆者が話をきいたこの母親にはSVSに通う3人の子どもがおり、最年長の12才の男の子は最近読むことをはじめ、次の10才の女の子は6才のとき、最年少の9才の男の子も最近始めたという。なかなか本を読み始めないことについては、やはり祖父母らからのプレッシャーがあり、とくに祖父は、親にだけでなく、子どもにも直接に「読めないの？」などという。しかし子ども自身が、「自分たちの学校はこういう学校なんだから」と説明

している。近所の子からも同様なことを言われるが、その場合にも子ども自身が説明しているのだという。子どもたちがたとえ読みを始めなくても、SVSの子たちは礼儀正しく、別に乱暴なわけでもないので、近所の大人からは、ひどく問題だとは思われていないとのことだった。

(6) 子どもたちによる資金調達活動（ファンド・レイジング）

この学校には、さまざまな活動の母体となる「コーポレーション」という組織がある。代表的なコーポレーションのひとつであるミュージック・コーポレーションについて、スタッフのマークに話をきいた。ミュージック・コーポレーションは、前述の防音設備のあるスタジオを有し、何種類もの楽器やオーディオ装置と、高級な録音装置（ハードディスク・レコーディングが可能）まで有している。スタッフのマークはもとロック・ミュージック



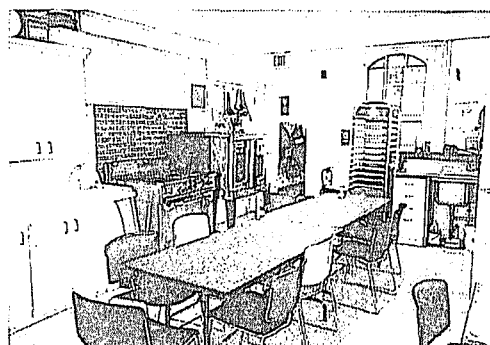
納屋の中の音楽室

ジシャンであり、この学校の卒業生でもある。このコーポレーションの最年少は12才。録音機器を使うためには、90分の説明を受けることになっている。学校からこのコーポレーションが受け取る予算は年間600ドルのみ。これは、本館とスタジオの計2台のピアノの調律費で消えてしまう。そこでこのコーポレーションは、メンバーが二つ以上の資金調達活動に参加しなければならないと決めているが、それは他のコーポレーションでは例がない。

そのひとつは「コーヒーハウス」という催しで、2月の最初の金曜日、5日に行った。馬屋にステージを作り、参加者から5ドルくらいずつとって食べ物も売り、1,000ドルもうけた。また少し小さな催しとして「ショー」も行う。これは、参加にはお金をとらず、サンドイッチなどを売る。ロックミュージックだけだったら参加者が少ないので、ファッションショーや歌なども募集した。150ドルから200ドルくらいもうける。それにくわえて、筆者の滞在中も、マークは子どもたちを指揮してキッチンで一緒にフライドチキンやベークドポテトを料理し、昼食のときに売っていたし、別の日にはアイスクリームソーダを作って売っていた。彼は、じつはプロの料理人としての経歴も有している。これらの資金調達活動は、学校が経済的に外に依存せず独立を守るため、すべて学校の中で行う。このような活動についてマークは、「もし、スタジオの利用法を講習して資格を与え、子どもがその後自分で部屋に入って楽器や録音



昼頃に出る購買部



キッチン

機材をいじるだけだったら、自分にとって子どもを知る方法がない。資金調達活動は、子どもを知るためにも重要なのだ。」と述べている。このように、資金調達活動は、必要な資金を得るだけのための行為なのではない。それはむしろ、スタッフと子どもが交流し、お互いを知るための教育活動そのものでもある。

(7) 資金調達活動と教育の社会・経済的側面

さらに、資金調達は経済行為である。SVSでの「学ぶ」とは、なにか自分のやりたいことをすることであるが、やりたいことをするためにお金が必要になるのは当然である。そうであれば、お金を獲得するのも学習に必要なことである。

そう考えれば、お金を獲得するということは、学習の外側にある学習の前提ではなく、学習を成立させる要件として、むしろ学習の内側にあるべきものである。そしてこのような視点が日本の教育にはない。お金のことを口に出さないのは、基本的に日本の文化の特質なのかもしれないが、とくに学校では、小遣いのような自分が管理するお金以外には、お金のことに触れない。

しかし、社会のなかのあらゆる活動や出来事は、金銭的な側面つまり経済的な側面をもつことから、教育の場だからとか教材だからという理由で、それを無理に捨象してしまうことは、教育の経済的な側面を欠落させ、教育を非現実的にしてしまうことになるのではないか。そして、経済的な側面や条件というのは、社会的な側面や条件なのだから、それは、教育の経済的側面だけではなく、教育の社会的側面の多くを欠落させることになるのではないか⁹⁾。

ところでこのことは、子どもだけでなく、そのような学校で働く大人の意識構造にも影響を与えているといえないだろうか。日本では、「先生の常識、世間じゃ非常識」と言わ

れることがあるが、教師のそのような非社会性の根源はいったいどこにあるのかと筆者はよく考える。教師になることを希望する青年集団にそもそもそのような特性があるのか、教員採用というスクリーニングがそのような人材を意図的・無意図的に選別しているのか、あるいは長いあいだ教職についていることで、そのような特性を徐々に獲得するのか、つねに明確な答えを得られない点である。しかしSVSでの観察とそれに基づく考察は、それは少なくとも教師集団が子どもに与えるもの、つまり教育内容の非社会性ゆえなのではないかと考えさせる。商売をしている人が扱っている商品の文化的特性から影響を受けるように、仕事をしている人は仕事の対象や仕事の場の文化的特性から影響を受ける。そうだとすれば、教師も同じかもしれない。社会的側面のうちのきわめて現実的な側面である経済的側面を捨象した教育内容を扱っているうちに、扱う主体もまたそのような側面を失っていくのだと考えられないだろうか。

(8) 他の学校への子どもの移動

ところでこのようなSVSで過ごした子が一般の学校に転校したときには、どのようなことがおきるのだろうか。美術担当のスタッフのメリーアンとのインタビューで、ひとつのケースについて知ることができた。彼女の学位は美術。そのあとでダンスを学んだ。子どものときからSVSを知っていた。修士の学位は美術教育で、修士課程の学生のと

き、マイアミの公立校で教えていた。そこでは、美術を選択する子は教えたくないような子ばかりだったが、ここでは違う。92年にこの学校にきた。そのとき娘は8才だった。フロリダからきて娘をここにいられたのだが、娘は地元の公立高校に出た。それはダンスをするためだという。別のある男の子もチームスポーツをするためにこの学校を出たという。

メリーアンの娘が出たもうひとつの理由は、本人がアフリカ系アメリカ人とのハーフなので、そういう子の多い学校に行きたかったことであった。もちろんこの学校では差別などは全くなかった。ただ、そういう子の多いところを旅行してそんな子たちと遊んだときに、そういう環境がいいと感じた。

「公立学校に行って、こことあまりに違うので、娘は困っていないか。」とたずねると、「娘の場合は困らなかった。しかしそれは、その子がこの学校で何をしてきたかということと、いつ出るかによる。16才まで読みを始めていない子が、読みを始める前に他の学校に出たら困るだろう。娘は、出る前に、出る準備のためではなく、教科の勉強をしていた。公立高校では、ここで何をしたかを聞かれ、この教科書をここからここまでやったというふうに説明した。」「では問題は何か他に何か。」と問うと、「問題はむしろ、むこうに行くと、なんでも徹底的にやれないことだ。すべて浅くて、物足りないと感じてしまうことだ。」「勉強以外の点ではどうか、生活態度等の点では困らないか？この学校では、いつ何を食べてもいいが、公立学校ではそうはいか

ない。そういう点は問題ないか。」とたずねた。すると「娘は、公立学校でこのことを『ゲーム』だと認識しているから大丈夫だ。もともと公立学校で育った子は公立学校がゲームだと分からないが、ここから行った子は、『ゲーム』だと分かる。」と答えてくれた。そして最後にこう付け加えた。「この学校は、離れてから、どれだけ好きだったかが本当に分かる学校だ。」

(9) 子どもの活動とインターネットの利用

今回の訪問は、とくにインターネット等のテクノロジーの利用についての観察であることは先述した。この学校のインターネット環境は、1.5MB(T1)での常時接続であり、プライマリ・サーバが WindowsNT、セカンダリ・サーバが LINUX であり、外部からの不正なアクセスを防止するファイアウォールを有している。情報関係のスタッフのスコットは、1980年代にこの学校の生徒だった。生徒の後は非常勤の職員として働き、1994年から常勤のスタッフになっている。彼は、テクノロジーについて、「正しく習うといつも時代遅れになる。それは、教える内容の整理と提示に時間がかかるためだ。それに対して、自分で学べば最新のことが分かる。」という考えをもっている。これは、日本の情報教育の本質的な問題のひとつを言い当てている。学習指導要領を編成して発表し、何年かの移行措置期間の後、全国一斉に実施し、それを10年単位で続ける日本の現行の教育システム

は、情報テクノロジーのように発展の早い領域では有効に機能しない。学習指導要領を編成し、その教育を実施する頃になると、すでにその内容は古くなっているのである。

彼はまた、子どもと接することについて、「子どもが問題をもち、その答えを得るのを見るのは本当に喜びだ。」と語っている。このスコットも前述のマークも、一見するとインテリ風を感じてはいるが、言うことに味があり、表現力があって奥が深い。二人ともSVSの出身だが、それはここの出身者に共通する特質なのかもしれない。

この学校は、ボストン中の公立学校にインターネット接続を提供しているメリマック教育センターというプロバイダからインターネット接続の提供を受けている。この学校には、インターネットに接続されたパソコンは5台しかなく、インターネットを使うのは、200人の子どものうちの150人ほどだけである。しかしきわめて衝撃的なことがおきている。それは、同センターの統計によれば、ボストン中の全ての公立学校からのインターネット使用の総計よりも、この学校1校の使用のほうが多いというのである。

じつは、インターネット先進国のアメリカの公立学校でも、学年や教科に切り分けられた教育内容を前提としている以上、インターネットのあまりにも広大かつ複雑で学年や教科に対応しない情報空間を、有効に教育利用することは困難なのである。また、いわゆる有害情報の問題もある。そのために、まず有害情報を遮断するフィルタリング・ソフトを



パソコン室

導入した上で、学習の課題に応じた特定のWEBページの所在を教師が示し、そのページを印刷して読ませるような利用や、せいぜいWEBを使用した特定の教育システム¹⁰⁾を使用することになる。こういう利用なら、じつは書物を使うのとほとんど変わらず、インターネットを使用する意味はそれほど大きくない。

それに対してSVSでは、そもそも学年や教科に切り分けられた教育内容が存在しない。子どもが学びたいことを学ぶのであり、その学びたいことは、釣り、大工仕事、キリスト教の歴史、航海術、写真技術、料理、環境問題、音楽情報のデジタル化など、ありとあらゆるテーマであって、通常われわれが想定するような、小学校3年生の理科とか高校1年生の数学というような、学校教育での単元のようなものである必要はない。そういう課題に関して、自分で情報を取得して学習を進めていく場合にこそ、インターネットは実に有効な手段に成り得るのである。

またSVSでは、子どものインターネット

ト利用には、まったく何も制限を加えていない。スコットに、フィルタリング・ソフトは入れているかと質問すると、「そういうものは入っていない。ルールブックがあるから大丈夫だ。何も問題は起きていない。」と答える。つまり、学校にはルールがあり、それが尊重されているし、子どもたちは自分の行動に責任をもっている。したがって、有害情報を見るというような問題は起きないというのだ。

フィルタリング・ソフトは完全ではなく、有害な情報も通してしまうことがあるし、有害でない情報をブロックしてしまうことがある。しかしもっと重大な問題は、フィルタリング・ソフトが、教師や学習者が分からない仕組みで分からないうちに、得たい情報を遮断し、場合によっては情報の存在さえ隠してしまうことである。普通の学校でも、図書室に入れる図書は教師が選定するのであり、業者にまかせて納入させるようなことはあり得ない。しかしフィルタリングソフトのフィルタの仕組みや基準は、必ずしも完全には明らかにされていないので、業者に情報の善し悪しの判断を任せているのと同じである。筆者は以前から、これを利用することは、その点で教師や保護者の主体性や責任の放棄であると考え、問題視してきた。フィルタリングソフトを使わなくてはならないくらいなら、インターネットを使う必要はないし使うべきではないとさえ考えてきた。しかし実際に、フィルタリング・ソフトを使わなくてよい学校が存在するのかわからなかった。けれども、それは実際に存在したのである。

以上のように、インターネットの有効な活用は、発達段階に応じて系統化された所与の教育内容を子どもの集団に一方向的に与えるこれまでの教育とは適合しないし、子どもが自分たちのルールに従って責任をもつ学校でこそ、有害情報の問題が根本的に解決できるのだということを、SVSのインターネット利用から強く考えさせられたのである。

(10) 背景にあるアメリカ社会の自由と自己責任の原理

しかしさまざまなインタビューを通して、この学校のこのような文化には、それを支える大きな背景があるとも感じた。それはアメリカの文化である。そのことを示す、ある子どもとあるスタッフとのインタビューを紹介する。

・生徒ポールの家庭

玄関の外のベンチにすわり、テーブルに大学入学試験 SAT の本を広げて読んでいたポール（16才男）に、この学校に来た背景などをたずねた。

彼が6才のときに両親が離婚し、父親はアマースト（西に100kmほど行った市で、マサチューセッツ大学がある）に住んでいる。自分も11才までそこに住んでいた。母親はこちらと一緒に住んでいる。しかし彼はバスケットをやっており、もうしばらく考えて、たぶんアマーストの公立高校に転校する。そのときは、父親と住むことになり、母親もたぶん

そちらに引っ越す。

父親は現在、ガールフレンドと住んでいる。こちらにいる母親は、男性と住んでいて、自分もいっしょに住んでいる。母親とその男性は、夫婦や恋人のような関係ではなく「良い友だち good friend」である。その男性には15才の娘がいて、その子もこの学校にきている。

日本ではあり得ないような彼の家庭環境について、「こういう状況は日本ではないが、アメリカでは多いのか？」という問いにたいして、「あまり普通のことではない。でも実際にこういうことはあるし、ひどく複雑に聞こえるかもしれないが、自分にとってはシンプルなことなんだ」との答えだった。母親は本来は心理療法士、つまり専門職であるが、今は農場で石積みなどの労働をしており、その男性も一緒に働いている。このように、専門職でも、一時的に肉体労働をすることや、頻繁な離婚と、ふたつの家族が一時的に一緒に住むような家族？の新しいあり方など、アメリカの家庭や社会の多様なあり方に触れた思いがした。

・スタッフのマイケルとその前任者

スタッフのひとり、マイケルは、14才の息子と11才の娘がここにきている。筆者の、「子どもたちは、父親と一緒に学校で嫌じゃないか？」との問いに対し、「自分が先にここで働いていたし、子どものプライバシーを重視しているから嫌がっていない。また自分は、学校の中ではスタッフとして、学校の外

では父親として接しているから。」と答えている。彼は MIT (マサチューセッツ工科大学) で生物工学を学んだ。カリフォルニアで、温室作りなどの造園をしていたが、結婚してニューヨークで教師をしていた。

なぜ SVS に来たのかという問いに対して、「大学でスペインの内乱時にバルセロナにあったアナーキズム政府のことを教えてくれた先生が、SVS について教えてくれ、自分の友人と二人で興味をもち、ボストンからここを訪問した。その友人は大学卒業後このスタッフになった。この友人がここを出たとき、自分が来た。まったくの入れ替わりではないが。」と答えた。ここにずっと勤めるのかという問いに対しては、「子どもが卒業するころ、また何をするかを考える。」と答えた。彼の前任者はなぜここをやめたのかという問いには、「彼はただ何か他のことがしたかった。若いときにここに来て、子どももいなかった。大学では食品科学を専攻していた。音楽にも堪能で、音楽をやりたかったのかもしれない。じっさいその後、サンフランシスコでギターを教えていた。その後でオレゴン州ポートランドでプレッツェルを売る商売をはじめて成功し、その会社を売って、有機食品と食品加工のプロセスを認定する組織をはじめている。それこそが彼が大学で学んだ専門だ。」あなたはここをやめたら何をしようと考えているのか。前任者が食品科学にもどったように、あなたも大学の専門の生物工学に戻るのか、という問いに対しては、「自分は何か書き物をしようと思う。現在の

自由さを保持していいたいと思っている。」と答えた。

マイケルも、前スタッフだった彼の友人も、自分の自己実現のために、自分の取り組むべきことをつねに求めているように思える。そしてそのための職業選択、転職、移動に関してきわめて自由な考え方をもっている。もちろんそれは、誰でもそうなのではなく、彼が、「MIT 出身の人間は、自分をどこでも売れると確信している。」というように、自分の能力に自信をもっているからこそなのかもしれない。しかしやはり、終身雇用を前提としてきた日本の社会にはない考え方や、生き方を感じた。

(11) 最後に「ここは学校か」

この、普通の学校とは全く異なる場所について、「いったいここは学校なのか」という気持ちを抱く人も多いと思う。それは当然の疑問である。そのような疑問をもつ人に、ミーガン（16才：女子）とのインタビューを紹介しよう。彼女は外の芝生の上にすわって、画家エゴン・シーレ(1890-1918)についての本を読みながら、同じく絵に豊かな才能をもっているフリオと話していた。ミーガンは、彼女のカメラ Nikon FM2 をかたわらにおいている。このカメラは露出計は内蔵しているが、完全な手動カメラで、日本では大学の写真専攻の学生が使うカメラである。このことから彼女は、写真(を)専門的に勉強しようとしていることがわかる。ミーガンは、



屋外で読書する生徒

さきに美術スタッフのメリーアンにインタビューしたときに、そばで陶器の釉薬をまぜながら話に参加していた思慮深い印象の少女である。彼女とフリオと、絵や写真についていくつかの話をしたあとで、最後に筆者自身の疑問でもある「ここは学校だと思うか？」という質問を投げかけてみた。すると彼女は、しばらく考えた後で、次のように答えた。「まず、ここではたくさんの学びがなされています。それからここは子どものための場所です。最後にここには『自分たちのルール』があるし、お互いの敬意が大切にされている場所です。だからここは確かに学校だと思う。」

ミーガンのこの説明は非常に意味深い。彼女は、説明のなかで、自分で考えながら学校の「定義」をしている。この定義を受け入れれば、学校にはこれらの要件がなければなら

ないし、これ以外のことは必要ないということになる。振り返って日本の学校のことを考えるとどうだろうか。日本の学校でなされている「学び」とはなにか。また、日本の学校には校則はあるが、それは自分たちでは変えられないから「自分たちのルール」とはいえないのではないか。そして、子ども同士の間や子どもと教師の間に、「お互いの敬意」は大切にされているのか。さいごに、いじめや不登校の増え続ける日本の学校は、はたして本当に「子どものための場所」だといえるのか。

5. おわりに サドベリーバレー・スクールから学ぶこと

「数万両編成の長大な列車が、敷かれたレールの上をまっすぐに爆走し続けてきた。現在もそのスピードは落ちていないし、誰にもこの列車を止めることはできない。しかし列車が走り続けるうちに、大きな地殻変動があり、そのレールの先は今は崖になっていて、このままではこの列車が崖から転落してしまうことは必至である。そしてこのことは、この列車の乗務員も乗客も、また列車の外にいる人々も感じている。大事故の予兆として、列車の内外でいくつもの問題が起き始めている。しかし、崖をさけるためにこの列車の走るレールを急激に曲げてしまったら、列車は脱線してしまうにちがいない。また、脱線しないまでも、乗員や乗客や、これまで運んできた貴重な荷物が振り落とされてしまうかも

しれないし、あるいは列車内で乗客が将棋倒しになってしまったり、荷崩れをおこしてしまったりするかもしれない。だから、急激に曲げるわけには行かない。しかしなんとかして、どこか新たな目的地を設定して、その方向へレールを敷き、ポイントを切り替えなければならない。問題は、その新たな目的地が誰にも見えていないことである。」

これは、日本の学校教育の現状と課題に関して筆者が抱いてきたイメージである。そして筆者は、長い間、その目的地を探そうと考えてきた。そのために、さまざまな学校の実践を観察してきた。しかし最近では、それは間違っていると考えるようになった。それはつまり、そのような長大な列車全体を一度に曲げてやる新たな目的地など本当はなく、必要なことは、それらを、より小さな単位に切り離して、それぞれの乗客や乗員の意志で、自由に目的地を設定することなのである。

日本の学校教育を改革していくためには、今後このように多様な学校のあり方を認めていく必要があると考える。これまでのような



入り口付近から母屋を望む

学校がいいと思うものはそれを維持してそこで学べばいい。しかしそうでない学校を望むものには、それを実現する自由を与えるべきである。

筆者は、筆者の大学の100人ほどの受講者のいる授業で「こんな学校があったら通いたかったと思う学校」という題でレポートを課したことがある。そしてそのレポートに書かれたことを総合すると、それはちょうどSVSのようなフリースクールになることが分かり、驚いたことがある。学生たちは、現実にそんな学校があるとは知らず、夢のような理想の学校の姿としてそれを書いたのだが、その理想は、レポートの中だけでなく、現実に存在しているのである。

もちろんSVSは、上述のようにその背景としてアメリカの文化や社会のあり方に支えられている。したがって、これをそのまま日本に移植しても、日本の土地に根付かない部分があるはずである。したがってその場合、学校のあり方のいくつかは日本の社会や文化にあわせて変えなければならないだろう。しかし同時に、日本の社会や文化のあり方も変えていかなければ、このような学校を作ることはいかなるわけでも、一般の学校にいま求められている学校改革を実現することもできないだろうと思われる。

SVSの存在は、日本の学校改革を考える上で、重要な基盤を提供してくれるものであると筆者は考えている。

<注>

- 1) この学校についての概略は、次の文献を参考。Daniel Greenberg (1996) *Free at Last, Sudbury Valley School Press* (日本語訳：大沼安史「超」学校。一光社 1996) なお、同校のホームページのURLは次のとおり。
<http://www.sudval.org/>
- 2) 登校しても教室に入らず保健室等で過ごす保健室登校等は登校と数えられる。また、極端なケースでは、校門まで来て校門に触れれば登校と数えるケースもある。なんとか不登校が30日を越えないようにする努力も一部に存在する。もちろんこれらは、子どもと教師の努力の過程として肯定的に評価することはできるが、不登校のこのような実態をこの調査は必ずしも正確に反映しておらず、調査の方法次第ではこの人数は相当増えるという見方もある。
- 3) この建物が建てられたときは、ここは有名な航海士の所有する100エーカーの農場であり、この建物はその農場主の邸宅であった。
- 4) グリーンバーグ氏は、この年齢混成を、この学校の「秘密兵器 secret weapon」と呼んでいる。Daniel Greenberg (1992) *Sudbury Valley's Secret Weapon: Allowing People of Different Ages to Mix Freely at School* (The Sudbury Valley School Experience Third Edi-

- tion, Sudbury Valley Press 所収)
- 5) Greenberg, D. & Sadofsky, M. (1992) *Legacy of Trust : Life After the Sudbury Valley School Experience*. Sudbury Valley Press
 - 6) Sudbury Valley School Handbook 中の "The School Meeting Lawbook"
 - 7) 日本ではこの問題は逆に少ない。外国から見れば非常に難しい漢字を含む複雑な文字システムをもつ日本語で、どうして読書障害が頻発しないのかと、外国の教育者や研究者はよく疑問を呈する。その理由の一つは確かに教育システムや教師の優秀さ、また学習者の勤勉さにある。しかし同時に、ひらがな、カタカナ、漢字という日本語の複雑な文字システムが、子どもにとって「読み」を、かえって間口が広く敷居の低いものになっている
 - 8) 点に着目する必要があると筆者は考えている。
 - 8) ただし、最後まで読み書きができなければ、後述の卒業の要件を満たせないのので、卒業資格を得ることができない。
 - 9) SVS では、直接に学習に結びつかない資金調達活動も認められる。以前に3人の子どもが「自分たちのボートを買いたいから学校でパンを売らせて欲しい。利益の10%は学校に寄付するから。」というビジネスを申請し、全校会議で認められ、同様な「起業」はその後も認められている。
 - 10) このようなものとして、たとえば筆者のおとすれたフラミンガム市の諸学校では、WebQuest (<http://edweb.sdsu.edu/webquest/webquest.html>) の利用を奨励し、教員に対するワークショップを行っている。